

「譲渡不可能性」の概念をめぐって

古瀬 公博(一橋大学大学院商学研究科)

Mar 2006

No.19

「譲渡不可能性」の概念をめぐって
—交換におけるヒトと「もの」との関係—

一橋大学大学院商学研究科
古瀬 公博

1. 問題設定

本論文の目的は、文化人類学の領域で使用されている「譲渡不可能性 (inalienability)」という概念に注目し、この概念が現代における交換を理解する上でも非常に重要な示唆を与えてくれることを示すことである。

譲渡不可能性とは、1980年代から文化人類学の領域で議論され始めた概念であり、「ある『もの』とその所有者との紐帯を切り離すことができないため、その所有権を完全に他者に移転することができない」という「もの」の性質を表したものである(Weiner 1985, 1992)。譲渡不可能性の概念は、未開社会において贈与の対象になる「もの」の性質を現すために使用されてきた(Carrier 1991, 1995; Gregory 1980, 1982; Weiner 1985, 1992)。すなわち、所有者と切り離すことが困難な譲渡不可能な「もの」は贈与の対象になり、それに対して、所有者と分離することが可能である譲渡可能な「もの」が商品交換の対象になる、という議論がされてきたのである。本論文では、譲渡不可能な「もの」とその交換形態に注目した既存研究のレビューを通じて、未開社会ばかりでなく現代における交換という現象を理解するうえでも譲渡不可能性が有効な概念であることを示していきたい。

贈与や市場取引という交換形態に関する研究や、ある「もの」が商品化するプロセスに注目した研究は文化人類学の領域に限られたものではない。歴史学の領域では、たとえば、中世ヨーロッパにおけるキリスト教教会に対する土地の贈与に関する研究(White 1988)や、19世紀イギリスにおいて市場経済化が進展するプロセスを明らかにした研究(Polanyi 1957)など、贈与や商品化に関する多数の研究が存在する。

現代の市場経済社会を分析対象とした社会学、とりわけ消費文化論の領域においても、ヒトと「もの」との関係に注目した研究が存在する。たとえば、商品として購入した「もの」との間に切り離しがたい関係を構築することで自己のアイデンティティを確立する消費者に注目した研究(Belk 1988; Csikszentmihalyi and Rochberg-Halton 1981; Richins 1994; Wallendorf and Arnould 1988)や、自己と切り離しがたい「もの」(芸術作品や愛用していた家具など)を売却する際の所有者の感情や行為に注目した研究(Belk, Sherry, Jr., and Wallendorf 1988; Belk, Wallendorf, and Sherry, Jr. 1989; Herrmann 1997)など

が存在する。

もちろん、ヒトと「もの」との関係の性質だけが交換形態に影響を与えているわけではない。交換相手との関係の性質もそこで採用される交換形態に強く影響を与えている (e.g. Carrier 1995; Gregory 1982; Sahlins 1972)。しかしながら、本論文では、交換におけるヒトと「もの」との関係に問題を限定して、ヒトと「もの」との関係が交換形態の選択に与える影響について議論していきたい。

本論文でレビューの対象とするのは、未開社会における交換を分析対象とした文化人類学と、現代における交換を分析対象とした社会学、とりわけ消費文化論である¹。この2つの領域の既存研究をレビューすることによって、文化人類学で注目されている譲渡不可能性の概念が現代における交換を理解するうえでも非常に有効であることを示していく。とりわけ、本論文では、市場経済が発達している社会において、譲渡不可能な「もの」を売却せざるをえないときに、人々がどのように売却を実行するのか、という問題に注目して議論していきたい。

2. “inalienability”の訳語の設定:「譲渡」と「疎外」

本論文では、「譲渡不可能性」という必ずしも広くは知られていない概念について議論していくので、まずは“inalienability”の訳語として「譲渡不可能性」を選択した理由について議論を始めることにしよう。この概念の意味を深く理解するためにも、“inalienability”の訳語としてどのような日本語が適切であるかについて議論することは意味があると筆者は考えている。

まず、“alienation”という単語の意味を英和辞書で引くと、「①疎んじること、疎遠、② [法律] (不動産の) 移転、譲渡、③疎外、④ [精神医学] 心神喪失、⑤ [統計] 無相関、⑥ [演劇] 異化」という訳が掲載されている²。法学や近代経済学の分野では“alienation”は「譲渡」という意味で使われており、哲学やマルクス経済学においては「疎外」、精神医学においては「心神喪失」の意味で使われているなど、比較的多様な意味で使用されている。それに対して、“alienable”という可能をあらわす単語の日本語訳としては、「譲渡、移転、売却可能な」という訳のみが掲載されており、また、“inalienable”に関しても、「譲渡されない、奪うことのできない」という訳のみが掲載されている³。一般的には、“inalienable”は「疎外できない」などの意味では使用されず、「譲渡できない」という意味で使用されている。

学術的な概念としては、“alienable”よりも“inalienable”のほうが使用される頻度が

高く、主に法学や言語学、文化人類学の領域で使用されている⁴。法学の領域では、「基本的人権は譲渡できない」などの文脈で“inalienable”が使われている。「譲渡できない権利(inalienable rights)」という表現はジョン・ロック『市民政府論』(1690年)には見られており、また、18世紀のアメリカ独立宣言において用いられていることがよく知られている(深田 1990)。言語学の領域では、親族関係や身体などの生来的に固有であり、購入することのできない所有物を「譲渡不可能(inalienable)」と表現しており、譲渡不可能な所有物を表す名詞の性質や構文の性質に関する議論が行われている(青木 2000)。

本論文で議論の対象とする文化人類学の領域では、“inalienable”は「ある『もの』とその所有者の紐帯を切り離すことができないため、所有権を完全に移転することはできない」(Weiner 1985, 1992)ことを指しており、日本語訳としては「譲渡不可能」が選択されている(Godelier (山内訳) 2000: 48; 今村 2000: 210; 小田 1991)。しかしながら、文化人類学における“inalienable”の概念には、「譲渡できない」という意味だけでなく、「疎外できない」という意味が含まれていることには注意が必要である。

「疎外」という概念は、そもそも一体であったヒトと「もの」とが切り離され、ヒトが「もの」を自由に扱えなくなることを指している⁵。すなわち、ヒトと「もの」との関係に力点を置いた概念なのである。次節で詳しく議論するように、文化人類学の領域で“inalienable”の概念にはじめて意識的に注目したGregory(1980)は、「譲渡できない」と「疎外できない」ことの2つの意味で“inalienable”を使っている。*Inalienable Possession*という研究書を出版し、他の文化人類学者に大きな影響を与えたAnnette Weinerは、「もの」の所有権を移転できないことよりもむしろ、そもそも一体であったヒトと「もの」とを切り離すことがむずかしいことを強調したいがゆえに、“inalienable”という概念を提示したと述べていることから(Weiner 1992: 33)、「譲渡できない」だけでなく「疎外できない」という意味を“inalienable”に含めていることが推測される。また、文化人類学者でもあり、歴史家でもあるCarrier(1992, 1995)は、16世紀から19世紀のイギリスを対象にして、労働者と生産物、生産手段、他の労働者との関係が切り離されていく歴史のプロセスを記述する際に、“inalienable”の概念を適用している。ここでは、明らかに、“inalienable”は「譲渡不可能」ではなく「疎外不可能」という意味で用いられている。

文化人類学における“inalienable”の概念が「ヒトと『もの』とを切り離すことができないこと」と「所有権を移転することができないこと」の2つの意味を含んでいるがゆえに、意識的にせよ無意識的にせよ、文化人類学者は「疎外できない」と「譲渡できない」ことの2つの意味で“inalienable”を使用してきたのだと思われる。また、日本人の

文化人類学者らが“inalienable”の日本語訳として選択している「譲渡不可能」にも、「もの」を譲渡できないことだけでなく、ヒトと「もの」との間に切り離しがたい関係が存在していることも含まれていると思われる。本論文でも先行研究と同様に，“inalienable”の日本語訳として「譲渡不可能」を採用するけれども、この言葉には「疎外できない」と「譲渡できない」ことの2つの意味が込められていることをここで改めて強調しておきたい。

3. 未開社会における譲渡不可能性

文化人類学の領域では、1980年代から譲渡不可能性という概念が議論されるようになった。未開社会におけるヒトと「もの」との関係にいち早く注目した Marcel Mauss『贈与論』(原著 1923～24年)の再評価が1980年代に進む中で、譲渡不可能性という概念が提示され、注目を集めるようになったのである。

3-1. Gregory(1980)による譲渡不可能性の概念の提示

譲渡不可能性という概念をはじめて意識的に使用したのは、Christopher A. Gregory である。学会誌 *Man* に掲載された1980年の論文“Gifts to Men and Gifts to God: Gift Exchange and Capital Accumulation in Contemporary Papua,”のなかで譲渡不可能性の概念を提示している。贈与と商品交換の特徴を整理するために、Mauss『贈与論』(1990)と Karl Marx『資本論』(1961)に Gregory (1980) は注目した。Gregory(1980)が両者の研究の中で注目したのは、①未開社会では財の所有権の移転はされにくく、近代社会では財の所有権の移転がされやすいことと、②その相違はそれぞれの社会におけるヒトと「もの」との関係の相違に原因があること、の2点に要約される。この2点について、Mauss(1990)と Marx(1961)がそれぞれどのような議論をしていたのかをごく簡単に紹介したうえで、Gregory(1980)について議論していくことにしよう。

Mauss が『贈与論』において強調していたのは、近代社会においてはヒトと「もの」との境界が明確に区分されているのに対して、アニミズムが浸透している未開社会ではヒトと「もの」との境界があいまいである、という点であった(Mauss 1990)。未開社会のように、ヒトと「もの」との区分があいまいであると、交換しようとする「もの」にヒトの存在が残り続けるため、完全に所有権を移転することが困難になる。所有権の完全な移転が保証され、商品経済が発達するためには、ヒトと「もの」との区分が人々に明確に認識されるようになることが必要であると Mauss(1990)は主張しているのである。

未開社会と近代社会における交換形態を比較する方法を採用しているという点で、Mauss(1990)と Marx(1961)は類似している。Marxは『資本論』(1961)のなかで、近代における商品交換の特徴を明らかにするために、未開社会における交換形態と対比させている。近代社会と未開社会の交換形態を特徴付けているものとして私的所有権の有無に Marx(1961)は注目した。私的所有権が確立している近代社会においては商品交換が行われ、財産が共有されている未開社会の共同体内部では所有権の移転を伴う商品交換は行われない。未開社会においては、他の共同体との境界において商品交換が始まり、それが徐々に共同体内部にも浸透していくと Marx(1961)は議論している。

Marx(1961)は、商品経済が成立する条件として私的所有権の確立に注目し、Mauss(1990)は、私的所有権が確立する条件として、ヒトと「もの」との区分が明確に認識されるようになることに注目している。Mauss(1990)と Marx(1961)のこれらの議論に Gregory(1980)は注目し、未開社会における「もの」と近代社会における「もの」の性質を表現するために、“inalienable”と“alienable”という対比を提示した。所有権の移転可能性と、ヒトと「もの」との関係という2つの点に Gregory(1980)は注目していたため、ここで導出された“inalienable”という概念にも、「所有権の譲渡ができないこと」と「ヒトから『もの』を切り離せないこと、疎外できないこと」の2つの意味が含まれていると思われる。

“alienation”という概念を「譲渡」と「疎外」の2つの意味で Gregory(1980)が用いていることは、“alienable”と“inalienable”という概念を導出する過程を詳細に見ていくと理解することができる (Gregory 1980: 640-641)。まず第1に、Gregory(1980)が“alienation”を「譲渡」の意味で使用している根拠を示していこう。その根拠とは、論文中で引用されている『資本論』の文章の中で使われている“alienation”がドイツ語で「売却」や「譲渡」の意味である“veräußerung”の英語訳である、という点である。具体的には次の箇所である。

Objects in themselves are external to man, and consequently alienable[veräußerlich]. In order that this alienation [veräußerung] may be reciprocal it is only necessary for men, by tacit understanding, to treat each other as private owners of those alienable[veräußerlich] objects, and by implication as independent individuals. (Marx 1987: 91)

諸物は、それ自体としては人間に対して外的なものであり、したがって譲渡されうる

ものである。この譲渡が相互的であるためには、人間は、ただ暗黙の間に、その譲渡されうる諸物の私的所持者として、また、まさにこのことによって相互に独立した個人として、対することが必要であるだけである。(Marx 1961: 155-156)

ここで引用されている“alienation”に相当するドイツ語が“veräußerung”であることを Gregory(1980)が明確に意識していない可能性はもちろん存在する。しかし、上で引用した箇所が私的所有権制度の有無について議論していること、また、Gregory(1982: 12)においては、“...commodity exchange is an exchange of alienable things between transactors who are in a state of reciprocal independence. ‘Alienation’ is the transference of private property.”と記述している、という点からも、Gregory は“alienation”を「所有権の譲渡」という意味でも使っていることがわかるのである。

第2に、“alienation”を疎外の意味で使用している箇所を示していこう。Gregory(1980: 640-641)は“inalienable”の概念を説明する中で、パプアニューギニアにおけるカヌーや豚とその生産者との切り離しがたい関係について言及している。この文脈においては、“alienation”は「疎外」という意味で使われている。典型的には次の文章に表れている。

... inalienability is to be understood in terms of social relationship between a product and the labour that produced it. In a commodity economy the worker’s product is alienated from him or her by capitalist employer; in a gift economy there is no wage-labour/capital relation and the labourer’s product is not, in general, so alienated. (Gregory 1980: 641)

この文脈においては、“inalienable”は明らかに「疎外できない」という意味で使われているのである。

このように、Gregory(1980)においては、“inalienability”という概念に「譲渡できないこと」と「疎外できないこと」の2つの意味が含まれている。たしかに、「そもそも一体であった所有者と『もの』との関係を切り離すことができないので、その『もの』の所有権を譲渡することはできない」という現象を表現するためには、“inalienable”に2つの意味を含ませることは適切なかもしれない。しかしながら、“inalienable”を日本語訳する際には、「譲渡不可能」か「疎外不可能」のどちらかの訳語を選択する必要があり、うえで議論したように、「譲渡不可能」という訳語に「譲渡」と「疎外」の2つの意味をもたせて使用することが適切であると筆者は考えるのである。

Gregory(1980)の論文が発表された 2 年後の 1982 年には、学会誌 *Man* の「往復書簡 (correspondence)」という企画で、Daryl K. Feil と Frederick H. Damon, Gregory, Andrew Strathern が “Alienating the Inalienable” という論題で譲渡不可能性の概念について議論している (Feil, Damon, and Gregory 1982; Feil and Strathern 1983; Strathern 1982). ここでも、未開社会におけるヒトと「もの」との密接な関係と、その交換形態の特徴について議論されている。遅くとも 1982 年の段階で、未開社会におけるヒトと「もの」との関係を表現する概念として、Gregory(1980)が提示した “inalienable” が適していると他の人類学者も同意していたことがこの「往復書簡」から理解可能である。Gregory(1980)が提示した “inalienable” という概念がその後どのように議論されるようになっていったかについては、次項で議論することにしよう。

3-2. モース派による譲渡不可能性への注目

1980 年代半ば以降、モース派 (Maussian) と呼ばれる文化人類学者の間で譲渡不可能性の概念が頻繁に議論されるようになっていく (Carrier 1991, 1992, 1994, 1995; Howell 1989; Nicholas 1991; Weiner 1985, 1992). モース派とは、贈与経済におけるヒトと「もの」との関係に注目する文化人類学者たちのことである。1980 年以前の文化人類学における議論では、贈与経済におけるヒトと「もの」との関係というよりも、ヒトとヒトとの関係が注目されてきた。モースの研究の解釈としても、贈与交換が社会関係を形成するという指摘や、贈与とそれに対する返礼との関係に関する議論が主に注目されてきた (Howell 1989). しかしながら、1980 年以降には、贈与経済におけるヒトと「もの」との関係に注目したモースの貢献が再評価されはじめ、モース派と呼ばれる集団が登場してきたのである。

そのなかでも、Annette B. Weiner は、1985 年に “Inalienable Wealth” という論文を発表し、1992 年には *Inalienable Possessions* という研究書を出版している。Weiner(1985, 1992)は、トロブリアント諸島におけるマオリ族を研究対象とし、そこで行なわれている交換について調査・分析した。

トロブリアント諸島では、何世代にもわたって貴重品が人びとの間で交換されているけれども、その本来の所有者のアイデンティティがその貴重品に付与されつづけるという点に Weiner(1985, 1992)は興味を抱いた。手縫いのマントや軟玉でつくられた装飾品などの貴重品は他者に譲渡されたとしても、その所有者の存在が残り続けるため、所有権が完全に移転するわけではないのである。このような交換の特殊性を Weiner(1985, 1992)は「与えながら維持する (keeping while giving)」と表現している。

Weiner(1985, 1992)によれば、トロブリアント諸島のような未開社会では、貴重品が集団のアイデンティティを維持するうえで重要な役割を果たしており、もし、貴重品が失われると、その集団の権威が失墜してしまう。そのため、貴重品は他の集団に譲渡せずに、集団の内部で維持・継承されるか、他の集団に譲渡する場合でも、一時的に「貸し出す」という形態がとられるのである。トロブリアント諸島における貴重品は集団にとって譲渡不可能な財であり、譲渡されたとしても所有権の移転は完全には行なわれない(Weiner 1985, 1992)。これが商品交換との大きな相違点である。

譲渡不可能な「もの」に焦点を当てた Weiner の研究は他の文化人類学者に大きな影響を与えることになった。1990年代以降には、贈与経済の特徴を議論する際にはしばしば譲渡不可能性の概念が使用されるようになる(Carrier 1991, 1992, 1994, 1995; Howell 1989; Nicholas 1991)。たとえば、Carrier(1991)は表1のように贈与経済と商品経済を整理している。贈与経済では、疎外不可能な「もの」が交換対象となり、交換相手との関係は相互依存的であり、交換はしばしば義務として行われる、と整理しているのである。2000年以降においても、譲渡不可能性に注目した研究は引きつづき発表されている(e.g. Ferry 2002; Mills 2004; Mosko 2000)。

表1 贈与経済と商品経済の特徴

	贈与経済	商品経済
交換の動機	義務的な交換	自発的な交換
「もの」の性質	譲渡不可能	譲渡可能
交換相手との関係	社会的関係	匿名の関係

出所) Carrier(1991)をもとに筆者が作成した。

4. 現代における譲渡不可能性

近代化されていない社会では、ヒトと「もの」との境界があいまいであり、しばしば、ヒトと「もの」とが切り離しがたい関係を形成している。それに対して、近代化された社会では、合理主義が浸透し、アニミズムのような魔術的な思考様式が消えていき、ヒトと「もの」との境界が明確に意識されるようになった(Bird-David, 1999; Mauss, 1990)。たしかに、近代化されていない社会と比較して、近代化した社会では、ヒトと「もの」との区分が明確に意識されている。しかしながら、現代においてもなお、ヒトと「もの」との間に切り離しがたい関係が形成されていると認識されることが少なくないのである。また、

市場経済が発達した社会においては、譲渡不可能な「もの」であっても市場取引の対象になる機会も存在する。市場経済社会では、譲渡不可能な「もの」を贈与ではなく市場取引するという特殊な現象が見られるのである。本節では、現代におけるヒトと「もの」との切り離しがたい関係について指摘したうえで、譲渡不可能な「もの」を売却せざるをえない場合には、人々はどのように売却を実行しているのかについて議論していきたい。

4-1. 現代における譲渡不可能な「もの」

現代におけるヒトと「もの」との関係に注目した研究は比較的多く存在する (e.g. Belk 1988; Csikszentmihalyi and Rochberg-Halton 1981; Richins 1994; Wallendorf and Arnould 1988)。これらの研究では、所有者のアイデンティティの確立に「もの」が貢献していることや、所有者の過去の記憶や友人との関係を「もの」が象徴的に表していることが指摘されている。これらの役割をもつ「もの」は所有者に重要視され、自己の一部のように認識される「もの」も存在するのである。

Csikszentmihalyi and Rochberg-Halton(1981)は、現代のアメリカ社会において、人々のパーソナリティを形成するうえで「もの」がどのような機能を果たしているのかを分析している。具体的には、アメリカの都市部に在住する家庭を対象にして、家庭のなかで重要な位置を占めている「もの」について調査している。家具や芸術作品、写真、書籍、オーディオ機器などが家庭における重要な「もの」として挙げられた。それらが重要視されている理由は、記憶を喚起することや、家族など他者との関係を象徴すること、自己の特徴が投影されていること、などであった(Csikszentmihalyi and Rochberg-Halton 1981)。

Csikszentmihalyi and Rochberg-Halton(1981)によれば、現代においても、人々が所有している「もの」は所有者の性格や社会的地位などを表す機能を果たしている。個人のパーソナリティは外界に存在する「もの」と独立して構成されるわけではない。外界に存在する「もの」と関わりあうことを通じて形成される経験が個人のパーソナリティに影響を与えたり、また、個人のパーソナリティを表現するために「もの」を意図的に所有したりするのである。このように、現代においても、個人のパーソナリティを形成するうえで「もの」は重要な役割を果たしている。所有者のパーソナリティにとって重要な位置を占めている「もの」は、所有者と切り離しがたい関係にあると認識されているのである(Csikszentmihalyi and Rochberg-Halton 1981)。

所有者と切り離しがたい関係を形成している「もの」が失われると、所有者は自己の一部を失った感覚や、アイデンティティが傷つけられたという意識をもつ傾向にある(Belk 1988)。たとえば、災害によって大切な「もの」を失った際には、事実の否定から始まり、

怒り、落胆、事実の受容へと移行する感情の変化を人々は経験する(Belk 1988)。市場経済社会においては、災害や窃盗などのように非自発的に大切な「もの」を失う機会だけでなく、大切な「もの」を自発的に「売却」する機会も存在する。次項では、所有者と密接な関係をもつ「もの」がどのように売却されるのか、という問題について議論していきたい。

4-2. 譲渡不可能な「もの」の売却

現代においても、譲渡不可能な「もの」は存在している。現代における譲渡不可能な「もの」の交換として特徴的なのは、贈与ではなく売買の交換形態で第三者に譲渡不可能な「もの」が譲渡されることがある、ということである。未開社会においては、譲渡不可能な「もの」が贈与される際には、その返礼として、受け手も同様に譲渡不可能な「もの」を提供することが多い。それに対して、現代の市場経済社会においては、譲渡不可能な「もの」に対して、それと等価と思われる貨幣が支払われるということが起こりうる。市場経済社会においては、譲渡不可能な「もの」もまた市場を通じて交換することが可能なのである。ここでは、譲渡不可能な「もの」を市場を通じて売却する、という特殊な状況に着目した既存研究をいくつか紹介することにしよう。

譲渡不可能な「もの」を売却する手段は、大きく分けて、2つに分類することができる。第1に、売買に贈与の性質を付加した交換形態を採用するという手段であり、第2に、自己と「もの」との関係を主体的に切り離し、「もの」の譲渡可能性を高めたうえで売却を実行するという手段である。これら2つの手段について、それぞれ詳しく議論していこう。

4-2-1. 贈与と売買の混在する交換形態

譲渡不可能な「もの」を売却する際には、売買に贈与の性質を付加した交換形態が採用されることを指摘した研究として、ここでは Belk, Wallendorf, and Sherr Jr.(1989)と Hermann(1997)の研究を紹介しよう。Belk et al.(1989)は、神聖視している「もの」を売却する際に、人々がどのような態度を取るのかについて調査している。神聖視している「もの」を、売却という世俗的な行為の対象にするときの人々の葛藤や葛藤への対応の仕方に Belk et al.(1989)は注目したのである。具体的には、人形作家や彫刻家が作品を販売する状況や、コレクターが蒐集物を売却する状況などを分析している。

Belk et al. (1989)によれば、人形作家や彫刻家などの芸術家は作品を販売することで生計を立てていく必要があるけれども、彼らは作品に対して強い感情を抱いているため、通常の売買とは異なる交換形態を採用する傾向にある。たとえば、ある彫刻家は親しい顧客と楽しく会話をできれば満足してしまい、無料で作品を提供しようとする。それでは生計

が立てられないので、妹が商談を担当し、適切な価格をつけて作品を販売している。また、ある女性の人形作家は、作品の人形を大切にしてくれる人に届ける、というように売却という行為を解釈している。経済的利益を得るという売却の本来の目的を追求するのではなく、交換相手のもとで作品が大切に扱われることを彼女は重視しているのである(Belk et al. 1989)。

Belk et al.(1989)によれば、芸術作品などを売却という手段で第三者に提供するような場合には、売却という行為を「贈与」のように解釈することで、譲渡不可能な「もの」を売却する際に生じる忌避感を抑制しようとしている。商談を他者に任せたり、売却を贈与として解釈しなおしたりすることで、神聖視している「もの」を売却という行為で汚すことを避けようとしているのである。

譲渡不可能な「もの」を売却する際には、贈与と売買の要素が混在した交換形態が採用されることに注目した他の研究として、Herrmann(1997)が挙げられる。Herrmann(1997)は、現代のアメリカで行われているガレージ・セールを分析対象とした。ガレージ・セールで販売される「もの」の多くは所有者が長い間使用してきたものであるため、所有者のアイデンティティが比較的強く込められている。すなわち、譲渡可能性の低い「もの」が販売されているのである。愛用していた家具などの譲渡可能性の低い「もの」を売却するという状況や、社会的関係を形成する近隣の人々に財を販売するという状況のもとでは、理念的な売買が行われにくくなる。経済的利益の追求は抑制され、特に親しい人々に対しては、無料に近い価格で財が売却されるのである(Herrmann, 1997)。

経済的利益の追求が抑制されるなど、ガレージ・セールでは贈与の性質が強く見られるけれども、完全に無償提供するという手段が採用されていないことには注目する必要がある。Herrmann(1997)の解釈によれば、市場経済社会においては、人々が慣れ親しんでいる市場モデルと合致させるために、価格を付けて販売することが重要であり、そのうえで、大幅な値引きをするなど、贈与の性質を付加していくことが求められるのである。現代アメリカにおけるガレージ・セールを注意して観察すると、売買と贈与の要素が共存することによって、譲渡可能性の低い「もの」の交換が円滑に行われていることが理解できるのである。

4-2-2. 自己と「もの」との主体的な分離

譲渡不可能な「もの」を売却する際に生じる葛藤を緩和させる第2の手段が、主体的に自己と「もの」との関係を切り離すことで、「もの」の譲渡可能性そのものを高めるという手段である。

主体的に自己と「もの」との関係を切り離すという対応は、感情労働(emotional labor)と呼ばれる職業につく人々の間でしばしば見られる。感情労働とは、主に対面のサービスを提供する状況で、サービスの提供者が社会的に期待される感情を表明するというタイプの労働である(Ashforth, Blake, and Humphrey 1993; Hochschild 1983)。より具体的には、看護師やソーシャル・ワーカー、客室乗務員などの職業が感情労働に分類される。これらの職業では、感情という自己と一体である「もの」を商品として売却することが求められているのである。

感情労働に関する代表的な研究者のひとりである Hochschild(1983)は、客室乗務員が行う感情労働について分析している。あたかも心から乗客を歓迎しているかのように対応することが客室乗務員に業務として求められている。感情というきわめて私的なものを「商品」に変えて乗客に接するため、客室乗務員は心理的な葛藤を抱えやすい。客室乗務員の対応に乗客が満足を表してくれている限り、客室乗務員は葛藤を抱えることなく業務を遂行することができる。しかし、些細なミスに注文を付けたり、いすの座り心地が悪いなどと苦情を言ったりしてくる乗客に対しても穏やかに接しなければならないとき、客室乗務員は強い葛藤を抱えることになる(Hochschild 1983)。

Hochschild(1983)によれば、経験の浅い客室乗務員は、これらの苦情が客室乗務員という役割に向けられているのではなく、本当の自分自身に向けられていると認識するため、深く悩んでしまう傾向が強い。このような客室乗務員に対しては、客室乗務員の役割を演じている自己と、「本当の自己」とを切り離したほうがよい、というアドバイスが与えられている。すなわち、客室乗務員の役割を演じている自己を譲渡可能な「もの」として認識し、それに対して、いわゆる「本当の自己」を譲渡不可能な「もの」として認識し、前者のみを商品化の対象とする、という対応策が取られているのである。もちろん、感情労働者としての役割と「本当の自己」とを切り離すことはそれほど容易ではなく、感情労働を行っている「本当の自己」を実感することが難しく感じる人々も存在することが指摘されている (Ashforth, et al. 1993)。

「本当の自己」とそれ以外の自己とを分離し、後者を客観視するという認識の仕方は「自己の客体化」として注目されている (Rosenberg 1988)。Rosenberg(1988)は、Hochschild(1983)の議論や Marx(1961)による労働の商品化の議論に言及して、自己を客体化するという思考様式が自己の一部分を商品化の対象にすることを可能にすると主張している。また、Barnet and Silverman(1979)によれば、資本主義のもとで労働市場が成立していく中で、商品化の対象となる活動は必ずしも人々の本質とは関わらない、という観念が見られるようになった。そもそも自己と一体であった活動を分離可能なものとして認

識することで、人々は労働力を市場で売却できるようになったと **Barnet and Silverman(1979)**は指摘している。「本当の自己」と商品化の対象にする自己とを主観的に切り離すことによって、人々は自己の一部を商品化できるようになると考えられるのである。

「現代における譲渡不可能性」を対象にした研究では、譲渡不可能な「もの」を売却するという特殊な状況が注目されており、興味深い知見が出されている。すなわち、譲渡不可能な「もの」を売却する際には、贈与の要素を付加した売買という交換形態が採用されたり、もしくは、自己と「もの」との関係を主体的に切り離すことで、譲渡可能性を高めようとしたりすることが行われているのである。市場経済が発達した現代における譲渡不可能性に注目することによって、譲渡不可能な「もの」の売却という特殊な状況を研究することができるのである。

5. 結論

本論文では、文化人類学における「譲渡不可能性」の概念に注目し、現代における交換を理解するうえでも譲渡不可能性が有効な概念であることを主張してきた。未開社会においては、譲渡不可能な「もの」が交換される際には贈与の形態をとるのに対して、現代においては、市場取引を通じて譲渡不可能な「もの」が交換されることもある。本論文では、譲渡不可能な「もの」を売却するという特殊な状況に注目して、先行研究における知見をもとに、そこで採用される交換形態について指摘したのである。

現代における譲渡不可能な「もの」の売却は特殊な現象であるけれども、このような現象を分析することによって、そもそも商品として認識されていなかった「もの」が商品として売買され始めるときに、どのような交換形態が採用されるのか、という重要な問題に対する理解を進めることができると筆者は考えている。このような問題には文化人類学や歴史学の研究者が中心となって取り組んできた。しかし、現代の市場経済社会を分析対象とすることによっても、市場の成立や商品化といった大きな問題にアプローチすることが可能である。現代における譲渡不可能な「もの」の売却という現象は非常に興味深く、また重要な研究対象であるので、この問題を対象にした研究がこれからも蓄積されていくことが期待される。

* 本論文は、一橋大学大学院商学研究科 21 世紀 COE プロジェクト助成資金（日本企業研究センター、2005 年度）による研究成果の一部である。

¹ 本論文では、紙幅と筆者の能力の制限から、贈与や商品化に関する歴史学の既存研究は

レビューの対象としなかった。しかしながら、歴史学の既存研究から得られるインサイトは非常に豊富だろうから、今後は歴史学の既存研究も広くレビューし、考察を深めていきたい。

² 『小学館ランダムハウス英和大辞典』小学館，1994，p. 70.

³ 『小学館ランダムハウス英和大辞典』小学館，1994，pp. 70, 1352.

⁴ 論文検索サービスを提供するウェブサイト「JSTOR」で，“alienable”と“inalienable”をそれぞれタイトルに含む論文を検索すると，“alienable”では2件，“inalienable”では18件の論文が検索された（2006年3月現在）。

⁵ ここで、疎外という概念そのものの意味について、簡単に言及しておくことにしよう。

「疎外」と和訳される“alienation”（英語）や“entfremdung”（ドイツ語）ということばは、「他人のものにする」という意味を持つ“alienato”というラテン語や“allotriosis”というギリシア語を語源とする（滝口，1998）。また、ドイツ語の“ent”が「分離」を意味し，“fremd”が「外国の」、「よそよそしい」を意味していることから、「自己と一体であったものを分離し、他人のものにする」という意味が「疎外」には含まれている（谷嶋，1992）。

参考文献

青木正博「譲渡不可能性の観点から見たロシア語の所有の与格の構文」『京都産業大学論集 外国語と外国文学系列』第27号，2000，pp. 35-61.

Ashforth, Blake E., and Ronald H. Humphrey, “Emotional Labor in Service Roles: The Influence of Identity,” *Academy of Management Review*. Vol. 18, No. 1, 1993, pp. 88-115.

Barnett, Steve, and Martin G. Silverman, “Separation in Capitalist Societies: Persons, Things, Units and Relations,” in Barnett, Steve, and Martin G. Silverman, *Ideology and Everyday Life: Anthropology, Neomarxist Thought, and the Problem of Ideology and the Social Whole*. Ann Arbor, Mich: University of Michigan Press, 1979, pp. 39-82.

Belk, Russell W., “Possessions and the Extended Self,” *Journal of Consumer Research*. Vol. 15, No. 2, 1988, pp. 139-168.

Belk, Russell W., John F. Sherry, Jr., Melanie Wallendorf, “A Naturalistic Inquiry into Buyer and Seller at a Swap Meet,” *Journal of Consumer Research*. Vol. 14, No. 4, 1988, pp. 449-470.

Belk, Russell W., Melanie Wallendorf, and John F. Sherry Jr., “The Sacred and the Profane in Consumer Behavior: Theodicy on the Odyssey,” *Journal of Consumer Research*. Vol. 16, No.1, 1989, pp. 1-38.

Bird-David, Nurit, “Animism’ Revisited: Personhood, Environment, and Relational Epistemology,” *Current Anthropology*. Vol. 40, Supplement, 1999, pp. S67-S91.

Carrier, James, “Reconciling Commodities and Personal Relations in Industrial Society,” *Theory and Society*. Vol. 19, No. 5, 1990, pp. 579-598.

Carrier, James, “Gifts, Commodities, and Social Relations: A Maussian View of Exchange,” *Sociological Forum*. Vol. 6, No. 1, 1991, pp. 119-136.

- Carrier, James G., "Emerging Alienation in Production: A Maussian History," *Man* (N.S.). Vol. 27, No. 3, 1992, pp. 539-558.
- Carrier, James G., "Alienating Objects: The Emergence of Alienation in Retail Trade," *Man*. Vol. 29, No. 2, 1994, pp. 359-380.
- Carrier, James G., *Gifts and Commodities: Exchange and Western Capitalism since 1700*. New York: Routledge, 1995.
- Csikszentmihalyi, Mihaly, and Eugene Rochberg-Halton, *The Meaning of Things: Domestic Symbols and the Self*. Cambridge University Press, 1981.
- Feil, D. K., F. H. Damon, and C. A. Gregory, "Alienating the Inalienable," *Man*. New Series, Vol. 17, No. 2, 1982, pp. 340-345.
- Feil D. K., and Andrew Strathern, "Alienating the Inalienable," *Man*, New Series, Vol. 18, No. 3, 1983, pp. 604-605.
- Ferry, Elizabeth Emma, "Inalienable Commodities: The Production and Circulation of Silver and Partimony in Mexican Mining Cooperative," *Cultural Anthropology*. Vol. 17, No. 3, 2002, pp. 331-358.
- 深田三徳「人権概念の生成・発展についての覚書：『譲渡可能な権利』から『不可譲の権利』へ」同志社法学, 第42巻第1号, 1990, pp. 159-195.
- Godelier, Maurice, (山内昶訳)『贈与の謎』法政大学出版局, 2000.
- Gregory, C. A., "Gifts to Men and Gifts to God: Gift Exchange and Capital Accumulation in Contemporary Papua," *Man*. (n. s), Vol. 15, No. 4, 1980, pp. 626-652.
- Gregory, C. A., *Gifts and Commodities*. London: Academic Press, 1982.
- Herrmann, Gretchen, "Gift or Commodity: What Changes Hands in the U. S. Garage Sale?" *American Ethnologist*. Vol. 24, No. 4, 1997, pp. 910-930.
- Hochschild, Arlie, *The Managed Heart: Commercialization of Human Feeling*. Berkeley, Cal: University of California Press, 1983. (石川准・室伏亜希『管理される心：感情が商品になるとき』世界思想社, 2000.)
- Howell, Signe, "Of Persons and Things: Exchange and Valuables among the Lio of Eastern Indonesia," *Man*. Vol. 24, No. 3, 1989, pp. 419-438.
- 今村仁司『交易する人間：贈与と交易の人間学』講談社選書メチエ, 2000.
- Mauss, Marcel, (Translated by W. D. Halls), *The Gift: The Form and Reason for Exchange in Archaic Societies*. New York: W. W. Norton, 1990. (有地亨訳『贈与論』勁草書房, 1962.)
- Marx, Karl, (Ben Fowkes(Trans.)), *Capital: A Critique of Political Economy*. London: Penguin Classics, 1990.
- Marx, Karl, (マルクス=エンゲルス全集刊行委員会訳)『資本論(1)』大月書店, 1961.
- Mills, Barbara J., "The Establishment and Defeat of Hierarchy: Inalienable Possessions and the History of Collective Prestige Structures in the Pueblo Southwest," *American Anthropologist*. Vol. 106, No. 2, 2004, pp. 238-251.
- Mosko, Mark S., "Inalienable Ethnography: Keeping-While-Giving and the Trobriand Case," *Journal of the Royal Anthropological Institute*. Vol. 6, No. 3, 2000, pp.

377-396.

Nicholas, Thomas, *Entangled Objects: Exchange, Material Culture, and Colonialism in the Pacific*. Cambridge, Mass: Harvard University Press, 1991.

小田亮「マナ・贈与・交通：《浮遊する徴》と譲渡不可能性」『DOLMEN』第5号, 1991, pp. 4-21.

Richins, Marsha L., "Valuing Things: The Public and Private Meanings of Possessions," *Journal of Consumer Research*. Vol. 21, No. 3, 1994, pp. 504-521.

Rosenberg, Morris, "Self-Objectification: Relevance for the Species and Society," *Sociological Forum*. Vol. 3, No.4, 1988, pp. 548-565.

Sahlins, Marshall, *Stone Age Economics*. New York: Aldine Publishing, 1972. (山内昶『石器時代の経済学』法政大学出版局, 1984.)

Strathern, Andrew, "Alienating the Inalienable," *Man*, New Series, Vol. 17, No. 3, 1982, pp. 548-551.

小学館ランダムハウス英和大辞典第二版編集委員会編『小学館ランダムハウス英和大辞典』小学館, 1994,

滝口清栄「疎外」『岩波哲学・思想事典』岩波書店, 1998, pp. 979-980.

谷嶋喬四郎「疎外」『ヘーゲル事典』弘文堂, 1992, pp. 307-308.

Wallendorf, Melanie, and Eric J. Arnould, " 'My Favorite Things': A Cross-Cultural Inquiry into Object Attachment, Possessiveness, and Social Linkage," *Journal of Consumer Research*. Vol. 14, No. 4, 1988, pp. 531-547.

Weiner, Annette B., "Inalienable Wealth," *American Ethnologist*. Vol. 12, No. 2, 1985, pp. 210-227.

Weiner, Annette B., *Inalienable Possessions: the Paradox of Keeping-While-Giving*. Los Angeles: CA: University of California Press, 1992.

White, Stephen D., *Custom, Kinship, and Gifts to Saints: The Laudatio Parentum in Western France, 1050-1150*. University of North Carolina Press, 1988.